

令和5年度沖縄県若年性認知症支援推進事業 一般向け講演会 報告書

1. 講演会名：「ヤングケアラーを学ぼう～親が若年性認知症になったらどうする？～」
2. 目的：若年性認知症の普及啓発、若年性認知症の方を介護する家族（子ども）の相談・支援・繋がりをつくる。若年性認知症の家族（子ども）の体験を知り、必要とされる支援について考える場とする。
3. 対象：ご本人、介護家族、一般市民、企業の皆さん、専門職、すべての皆様
4. 方法：沖縄県医師会館にて会場参加（50人）・オンライン同時開催での実施とする。会場参加は、若年性認知症ご本人とご家族、ヤングケアラー世代が居る家族を優先で案内した。
今年度も、本島中北部地区・離島地区のサテライト開催を考慮していたが、ヤングケアラー世代の居る世帯も少ない為、今年度は本島内（名護市・うるま市）は除外し、離島の石垣市・宮古島市の行政と認知症疾患医療センター職員の協力の下にサテライト会場を設置しての開催を行った。
テーマ1：一般社団法人ケアラーワークスの田中悠美子氏に登壇頂き、「ヤングケアラーとは」、ヤングケアラー・若者ケア-の概念・ヤングケアラーを取りまく環境や課題について、その支援活動についてお話し頂く。沖縄県が実施したヤングケアラーの結果について、全国の現状についても説明して頂いた。
テーマ2：「新オレンジサポート室について」「沖縄県若年性認知症支援ヤングケアラーの支援について」若年性認知症支援コーディネーターが設置されて支援が開始となってから、ヤングケアラー支援の事例報告を行った。
テーマ3：「元ヤングケアラーの体験談」として大橋氏と田中氏のトークセッションを実施した。
5. 主催者：沖縄県（受託先：特定医療法人アガペ会沖縄県若年性認知症支援推進事業担当新オレンジサポート室）
6. 日 時：令和5年11月4日(土) 開演時間 13時30分～16時
7. 会 場：沖縄県医師会館 3階ホール（〒901-1105 沖縄県島尻郡南風原町新川 218-9）
8. 参加費：無料
9. 配布資料：講師田中氏は他の県でも講演会を控えている為、資料提供は参加者のみに配布（期間を限定とし、11月6日にはホームページ上の資料ダウンロード中止とした）。新オレンジサポート室の資料は事前に、特定医療法人アガペ会のホームページからダウンロード出来るように準備。当日会場受付の方には資料を配布（各サテライト会場でも準備）。

10. 申込期間：令和 5年 10 月 27 日（金）～11 月4 日（土）当日まで。

会場・オンライン両方ともに、当日まで受付。

11. 申し込み方法：チラシ・パンフレットを①会場用と②オンライン用で作成。①会場申込フォームはGoogleでお名前（ふりがな）、メールアドレス、お立場、職種、居住区、登壇者への質問を入力。これまで電話・FAXでの申込であったため、裏面にはFAX用申込を添付した。②は沖縄県医師会館の職員でウェビナー申込フォーム作成して頂く（項目は①同じ）。チラシ・特定医療法人アガペ会・認知症疾患医療センター琉球大学病院のホームページからQRコード又はURLから受付入力可能。

メイン会場：50人・オンラインウェビナー1000人まで参加可能。

サテライト会場（石垣市のみ支援者家族限定案内、宮古島申込数次第で場所を準備）とし、各市で広報、支援者に案内をして頂いた。

※メイン・サテライト宮古会場申込は新オレンジサポート室で申込フォーム作成・受付管理し、サテライト会場の行政には事前申込参加者名簿を前日までに届ける事とした。石垣会場は地域包括支援センターで受付対応する方法で実施した。

オンライン申込フォームはメイン会場である沖縄県医師会担当者が担った。

※新型コロナウイルス・インフルエンザの感染状況もあったが、令和5年3月13日以降は5類感染症への分類対応となり、「沖縄県の感染症対策」に沿って開催した。

健康状態申告書は中止して受付名簿：お名前、お住まいの市町村、所属、何で講演会を知ったか？受付の際検温・記載をして頂く。

12. 広報

新聞掲載（琉球新報社・沖縄タイムス社へ掲載、各新聞社週刊発行の無料欄への掲載）
本島：間に合わず掲載なし。沖縄県高齢者福祉介護課から各市区町村の関係機関への広報 FAX、認知症疾患医療センター琉球大学病院・特定医療法人アガペ会のホームページ掲載、新オレンジサポート室の LINE 公式アカウント、Instagram、facebook 等の SNS を利用。会場参加については、若年性認知症支援コーディネーターが支援している方を対象に電話・メール等で案内。サテライト会場の各市でホームページ・離島新聞無料広告欄掲載、支援者に直接ご案内をして頂いた。

13. 事前申し込み確認：

①会場申込：（11月4日当日確認）18 名 （宮古：2名含む）

今回は石垣市は地域包括へ参加受付を任せたので事前申込は把握不可。

②オンライン（11月 4日当日受付）55 名 申込。

14. 当日参加者

①会場参加 47 名（事前申込者のうち 5 名オンラインへ変更、オンラインから会場参加 1 名）

メイン会場	サテライト石垣市	サテライト宮古島
27 名	7 名	13 名

会場参加者内訳 計 51 名

当事者	家族	職場	支援者	その他
2 名	8 名	0 名	23 名	18 名

※支援者内訳（理学療法士 1 名、精神保健福祉士 3 名、ケアマネージャー 3 名、作業療法士 3 名、包括支援センター 4 名、社会福祉士 2 名、障害者就労支援職員 1 名、行政 3 名、看護師 3 名、管理者 3 名、スクールソーシャルワーカー 1 名、企業 1 名）、その他内訳（記載なし 23 名→参加者名簿への内訳記載なし又、当日会場運営で携わった方が名簿記録ないがアンケート記載している等把握困難であったのでその他に含めた）

②オンライン参加者 36 名

当事者	家族	職場	専門職
0 名	0 名	0 名	36 名

*前年度は「支援者」「その他」の項目で参加者本人が選択で記載していたが、今回はオンライン参加者自身で選択して記載する項目に「支援者」「その他」を入れていなかった為、この項目では選択肢削除を行った(オンラインに関しては事前申込・当日参加者・アンケートに至るまで、開催場所の医師会館で対応して頂き、確認に至らなかった。

※支援者内訳（医師 2 名、看護師 4 名、保健師 1 名、薬剤師 1 名、作業療法士 1 名、理学療法士 1 名、医療事務 1 名、社会福祉士 6 名、行政・公務員 6 名、認知症地域支援推進員 2 名、ケアマネージャー 8 名、通所管理者 1 名、サービス提供者 1 名、学生 1 名）

（参加変更）オンライン申込から会場参加者：1 名

15. 内容

テーマ1. 「子どもが子どもらしく暮らす」 田中 悠美子氏

2009年東京都練馬区にて「若年認知症まりねの会」の立ち上げに参画。若年認知症者のソーシャルサポートネットワークづくりを研究間に掲げ、地域福祉実践や研究を行っている講師。大学の非常勤講師の傍ら、若年認知症の親と向き合う子ども世代の集い「まりねっこ」の運営、ヤングケアラー・若者ケアラーのサポートづくり、啓発・研究について取り組まれている。2022年2月に一般社団法人ケアラーワークスを立ち上げ、子ども・若者ケアラー支援に向けた活動を東京都府中市において展開されている。

講演会ではケアラーの定義についての説明や、ヤングケアラーを取り巻く環境等、詳細な説明があった。家庭内で、親や兄弟のケアをすることは常に家事や手伝いとして当たり前に行われている為、ヤングケアラーの当事者である本人が自分自身が“ヤングケアラー”という認識がないこと、又はそういう知識や情報がなく知らないままにその環境下に置かれていること、ヤングケアラーとは捉えられたくない子も存在する等の説明があった。周りから家庭内の困っていることが把握しづらい事や敢えて生活困難な部分を家庭外には出さないと発言した特殊な意識・環境下あるため、学校側からも支援が必要な対象者として捉えにくい事などの紹介があり、支援の難しさがある。子どもが子どもらしく成長すべき時期に見本となる大人の存在がなく、閉塞的な環境下で年齢を重ねること、家事や家族のケアをすることで子ども本来のしたいことや学業にも影響が出てしまうこと等の課題も大きい。「子どもの権利条約」、周りの人がヤングケアラーに気づくには…等の具体的な説明もあったが、周りが気付いても助け

を必要とするかどうかはその本人の意向になる…そういう点では声かけやサポートの仕方についても子ども自身が自分で意思表示しなければ介入の第一歩とはならず…子どもが困った時に頼れる、相談出来ると思ってもらえる関係性を築くことが重要という貴重なお話があった。

テーマ2. 「新オレンジサポート室について・若年性認知症ヤングケアラー支援の報告」

若年性認知症支援のワンストップの相談窓口である新オレンジサポート室について紹介。高齢認知症と病気自体は同じであるが、働き盛りの時期65歳以下で診断がつくため、経済的なこと、仕事のこと、子どもを養育する時期であり、課題も多い。若年性認知症支援コーディネーターの役割（業務と支援）について、1. 相談窓口、2. 支援ネットワークづくり、3. 地域や関係機関に対する若年性認知症に係る正しい知識の普及、4. 意見交換会等を通じた若年性認知症の人のニーズ把握、5. 就労や社会参加活動に係る支援について説明。

支援をする中で色んな部署との支援連携が必要な事や、高齢者にはない①経済的支援②就労支援③子どもの支援の集中支援がある。集中的な支援を終了しても、居住区の地域包括支援センターや、就労支援事業所、介護保険サービス事業所・ケアマネージャー等必要な関係機関へ繋ぎ、ご本人が65歳到達するまでは経過を追って後方支援する事を説明した。

若年性認知症の就労支援では認知症と診断されてもハローワークが活用できること、就労支援の方法(企業等で就労→福祉的就労→介護保険等によるサービス利用)の説明、支援連携の必要な窓口、多職種協働連携したチーム支援が必要な事、沖縄県のヤングケアラーの状況（県が実施した調査の結果について）・新オレンジサポート室が配置されてから実際に支援した事例でヤングケアラーの居る家庭への支援について事例報告を行った。子どもからのSOSで学校側に進路相談等の支援介入した事例等の他、数件報告したが、子どもの直接的な支援にならずに介入できないままという事例も多く、支援介入の難しさがあることをお伝えした。

今年度11月末に那覇市図書館でキックオフイベントを控えている沖縄県ヤングケアラーコーディネーターの講演紹介と既に公式LINEによる子ども・親が相談できる仕組みも開始されており、会場内にポスターを張り、参加者にはチラシも配布して周知した。

又、若年性認知症の早期発見・早期治療の重要性、“認知”ではなく“認知症”の正しい言葉の使い方の広報を行った。

テーマ3. 「元ヤングケアラーの体験」大橋 尚也氏

一般社団法人ケアラーワークス 田中 悠美子氏 トークセッション

まりねっこの会に参加している大橋さんが登壇。田中さんがファシリテーションしながら、若年性認知症と診断された父親の介護体験を振り返りながら、当時の大橋さんの気持ち等お話しして頂いた。父親の病気の兆候に母と自分は悩んでいたが相談場所も知らない、何をどう相談したら良いのかわからない時に、近所の方から「受診してみたらどうか？」という何気ないアドバイスがありがたかったこと、又、そのような縦・横の関係ではなく斜めの関係というか？悩みをポロっと吐き出せるような関係性って大事だと思う…等の発言があり、大橋さんの言葉に引き込まれて参加者はみな熱心に耳を傾けていた。

トークセッションの後で質疑応答をしたが、周りからの支援としてどの様な言葉かけが良いのか？等具体的なアプローチの方法についても具体的な質問が続いた。大橋さんから本人が望んでいない場合は、周りが良かれと思っても介入は逆効果になる得ること、大橋さん自身がターニングポイント的なアドバイスとなった近所の方の存在“斜めの関係”の様な、悩みを伝えられるような関係性の構築が大事ということを再

度お話して頂いた。

16. アンケート結果：会場 38 名回収 オンライン 11 名回答

①会場参加 回答 38/51 名 回収率 75%

 メイン会場 回答 20/27 名 回収率 74%

 サテライト会場（石垣市） 回答 7/11 名 回収率 64%

 （宮古島市）回答 11/13 名 回収率 85%

②オンライン参加 回 答 11/40 名 回収率 28%

※アンケート集計については別紙の添付いたしました。

17. 主催者の所感

今年度は委託先である沖縄県担当課からの挨拶を頂きました。本講演会の内容であるヤングケアラーについて沖縄県で実施された結果の報告を盛り込み、実際の講演会へ導入となりました。

昨年同様にメイン会場設営等は、認知症疾患医療センターの職員と特定医療法人アガペ会から職員の協力を頂いて実施した。又、昨年は本島南部に会場がある為、本島中北部からの当事者・家族の参加が難しい事、離島地区の参加を増やすには…という課題解決のために、本島北部地区(名護市)・本島中部地区(うるま市)・離島地区(石垣市・宮古島市) サテライト会場設置という方向で調整を行った。

当初、前年度のようにサテライト会場の共催依頼を考慮していたが、法人内の検討の際にサテライト会場の設置については各市町村の行政が担うことで実施してはどうかという意見もあり、早目に共催依頼の手配が出来なかった。離島地域にはサテライト会場として共催依頼を要望する声が強かったので、急遽協力依頼をかける形となり、開催日程までの準備が厳しい状況だった。今後は前以ての準備をして臨みたい。申込なくても会場・オンライン共に受付対応して頂く段取りへ変更とし、当日開催まで受付実施とした。前年度同様、離島地区の行政・地域包括支援センターにサテライト会場運営を担って頂いた。

又、沖縄県内の認知症疾患医療センターにもご協力頂いた。基幹型琉大病院には大学病院のホームページ掲載による広報、メイン会場である沖縄県医師会館運営をサマリヤ人病院・天久台病院・沖縄リハビリテーション病院、石垣市会場へぬちぐすい診療所、宮古島市会場へうむやすみゃあす・ん診療所と、各会場の運営を担って頂いた。また、会場運営に参加された認知症疾患医療センター職員の方の高校生の娘さんがボランティア参加をされ、講演会運営について体験して頂いた。

現在支援している対象者の中から、“ヤングケアラー世代”の居る家庭へ直接参加案内を送り、子どもの参加があるなら、講演会終了後に医師会館の別の会議室を借りて登壇された田中さんと大橋さんとの交流会の様な会を持てたらと準備していましたが…当事者と配偶者のメイン会場への参加が数名ありましたが子どもの参加は今回残念ながら無かった為、別会場での交流会は無しとした。

当日のオンライン開催については、前年度同様に沖縄県医師会館の職員 2 人在在中して頂き、機器等のトラブルの不安無く、運営に集中でき開催が出来た。開催前に医師会館のオンラインシステムに異常があり（地域の電気ケーブル修理の際に間違っ

て医師会館のケーブル切断した様子)、ハイブリット開催が医師会館では不可能との打診があり、法人側でオンライン再設置等の代替え案も検討した。医師会館側の早めの修繕依頼対応をして頂き、開催前にオンライン復旧したので代替え案は実行せずに済んだ。

コロナが感染症5類に位置付けられたが、専門職はオンラインの参加が多い傾向。サテライト会場以外で、オンライン申込をして複数名で聴取している可能性はあるが、こちらではその数の把握は出来ていない。今年度は行政職員の参加が多い印象でした。

子どもも夢や希望があり、それを断念することは将来の夢への実現を絶つことになる。子どもが子どもらしく暮らす…子どもが成長する過程には社会で生き抜く力を培う大切な時間。昭和のサザエさんの様な大家族での世帯生活の時代から、核家族が主流になり、その家庭環境下で一番頼れる大人が病気やケガなどで療養が必要な場合、子どもが家事やケアする状況になり得る。相談する場所も分からず、状況を改善する事も難しい中、そのような環境が長く続くのは良い事ではない。

ヤングケアラーの支援が全県で動き出している。若年性認知症の支援も手探りで一人一人の意向に合わせて居場所支援等を行っているが、ヤングケアラーも支援が始まったばかり。まだまだ、手立ても利用できるサービスが確立されたわけではない為、子どもがいる世帯への支援の道筋もまだニーズに応じての段階である。本事業の支援する子ども支援もそうだが、今日の講演を通して聴講して頂いた専門職から子どものSOSに早めに気が付く、子どもたちが気軽に困りごとを相談できるような人材の確保、利用出来るサービスに繋ぐことができる人材が1人でも多く誕生することを願いたい。

離島地区のアンケートにはパソコンがない、Wi-Fiの接続がない、オンライン機器の活用が出来ないが、今回の様な居住区の行政でサテライト会場の設置があれば「会場参加が可能」という記載が前年度に引き続きあった。コロナウィルスにより、オンライン講演会という便利な手法が全国民に普及されてきたが、残念ながら仕事で利用する方、専門職の方、若年層(コロナ感染で学校でオンライン授業の取入れ)等に限定される。それに馴染めない、家庭でオンライン参加が難しい一般市民への参加率を高める、認知症の普及啓発・広報をするという課題にも各市町村自体の工夫や配慮が必要ではないか?

終了後にもう一度講演内容を聞きたいとの事で、直接電話でアーカイブ配信を望む声があったが、講演会終了後週明け直ぐに全国認知症希望大使交流会等のサポートや相談支援の過密な状況が続き、今年度アーカイブ配信は対応できなかった。

当日の様子
(メイン会場)



(サテライト会場：宮古島市)



以上